

# 最近の計量経済学のテキストを評す

C.W.J.Granger

“A Review of Some Recent Textbooks of Econometrics”

Journal of Economic Literature, Vol.32,1994,p.115-122.

加藤久和

最近の計量経済学の進歩は目を見張るものがあり、その内容は多岐にわたるとともに実証分析に携わる者でさえその進歩を常に取り入れることは難しい。しかしながら、様々な実証分析の局面において、計量経済学の新たな成果を導入することで得られる恩恵は計り知れないものである。その場合、最近の計量経済学のテキストを紐解くことが問題解決の最短距離である場合も少なくない。このような需要増加を見込んだためか、あるいは供給主導型の出版が主流なのかかわからないが、洋の東西を問わず新たな計量経済学のテキストが洪水のように押し寄せている。

今回取り上げた論文は、最近発行された定評のある計量経済学のテキストについて、計量経済学の重鎮ともいえる Granger 教授が“辛口”の評価を行ったものである。Granger 教授の弁舌はテキストの評価を超え、計量経済学のあり方や教育方法まで幅広いものであり、考えさせられる内容となっている。

取り上げられたテキストは次の4冊である。

(1) Estimation and Inference in Econometrics,

R.Davidson and J.G.MacKinnon, 1993

Oxford University Press. (DM)

(2) A Course in Econometrics,

A.S.Goldberger, 1991

Harvard University Press. (GO)

(3) Econometric Analysis, 2nd ed.,

W.H.Green, 1993

Macmillan. (GR)

(4) Learning and Practicing Econometrics,

W.E.Griffiths, R.C.Hill, and G.G.Judge, 1993

John Wiley. (GHJ)

( )内は、以下における各テキストの略称である。いずれのテキストもアメリカのみならず世界的に利用頻度の高いテキストであり(但し水準も比較的高い)、わが国でも容易に手に入れることが可能である。但し、どのテキストも分厚い。最も分量があるのは GHJ の本文 866 ページ、最も薄い GO でも本文で 405 ページある。4冊を合計すると 3,000 ページ近い分量となる。これほど分量のあるテキストを丹念に読み込むには相当な時間がかかるであろう。どの本を選択すればいいか、以下では Granger 教授の評価を聞いてみよう。

Granger 教授は最初に、取り上げた4冊はいずれもよく書かれた本であるが、完璧なものにはほど遠いと嘆く(その理由についてはおいおい以下で示す)。そして、なぜ計量経済学のテキストが必要なのか、という根本的な問題を提起する。その答えは、経済データの性質の中には“統計学”ではあまり関心が払われないような性質 (Essential Economic Data Properties)、すなわち平均や分散に含まれるトレンド、季節性、パネルデータ、単位根、構造変化などの特有な性質があり、これを分析するために“計量経済学”という学問とその教科書が必要なのだ、というものである。

Granger 教授が、評判の高いテキストが完璧に程遠いとした理由は、こうした現実の経済データの性質を無視した、いわば理想的な環境(例えば大標本であるとか、あるいは誤差項の正規性が維持される等)の下におけるデータ分析にあまりにも重

点が置かれすぎている、ということである。その原因の一つとして、教師にとっても理想的な環境における経済データを扱うほうが教えやすいからであるという点や著者にとっても記述しやすいという点があることを指摘している。このようなテキストで学んだ学生は標準的な計量経済学のトレーニングを積むことはできるが、現実のデータのモデリングの興奮を味わうことはできない。その具体的な検証として、時系列データの性質に関する説明がテキストのどのあたりで扱われているかを一覧しているが、いずれもほぼ最後の一、二章が割り当てられているにすぎず、これこそが現実データとテキストの乖離であると批評している。

さて、4冊のテキストの相対的な評価はどうか？ Granger 教授は近年、重視されている計量経済学上の諸概念を選び、各テキストでどのように取り上げられているかについて評価を行っている。Granger 教授の表の内容は、それだけでも最近の計量経済学の重要事項を示しており、興味深いものがある。4つのカテゴリーに分かれた合計31項目で比較的高い評価を得たのは DM と GR である。一方、GO は現実との関わり合いを考慮した教育という点からも評価することはできないし、カバーする領域も狭いと手厳しい。GR は範囲の広さでは問題はないが、独習することは学生には難しいであろうと述べ、一方 GHJ は独習にいいもののカバー領域は劣ると評価している。最も教授に好評なのは DM である。厳密な議論が展開され、難しいが、ぜひ本棚に置きたい一冊であるという高い評価を与えている。

過去約20年間の計量経済学の進歩を省みて、Granger 教授は単純な仮定の下における推定や検定、連立方程式といった問題から近年になるほ

ど VAR、非定常変数などの動学的な話題に変化しつつあると言う。その中で、テキストは古い手法と新しい手法(最新の計量経済学のテクニックでも、どれがバブルでどれが今後もスタンダードな手法として残るかを判断することも難しいが)との選別に迷っており、いわば「日和見」的であると指摘している。今後とも標準的なものとなるであろう最新の成果はテキストの最後に出てくるのではなく、古いものと置き代わってテキストの前半で説明されるべきだという。また、PC や簡易プログラムの普及が、一方で現実データとの関りを深めるという意味で、計量経済学のテキストそのものを変えていく可能性があるという。Granger 教授によれば、こうした諸問題に答える、新たな世代のテキストが今後数年内に出版されるであろうと、期待を込めて結語としている。

本誌を含め、学術雑誌のみならず経済分析を扱った論文やレポートなどには計量分析が花盛りである。しかしながら、すべてが対象とする現実の経済データの性質を考慮した実証分析であるとは言いがたい。Granger 教授の言によれば、理想的な環境の下でのみ適応可能な統計上の推論が、何の疑いもなく援用されている研究もないとはいえないであろう。本文献紹介で取り上げた論文の目的は、テキストの批評であるが、少なくとも優秀なテキストとはこうした現実世界の姿を考慮に入れた実証分析の方法を提示するものであることが強調されている。実証分析とは、まさに現実を分析するための方法なのである。Granger 教授の論文は計量経済学のあり方を含め多くの点を示唆しており、関心のある方の一読を奨める。

( かつ ひさかず  
電力中央研究所経済社会研究所 )